

目的 本研究は服装造形のための実験研究の一つである。既に皮膚の色調と有彩色という表題で、昭和43年より昭和55年迄に計測した1137人の女子大学生の皮膚色調と純色の有彩色5色との関係について、明るく見える色調、暗く見える色調について報告した。対比現象は明度と深い関係があると考えられるので、色研に依頼し、明度4°、6°、8°の青色色紙を作成し、心理学実験を試みた。

方法 1)実験色票の作成 縦26cm横109cmの明度6°の灰色のラツマ紙に、縦13cmの4°、6°、8°の青色色紙を空間9cmずつあけて貼付し、色紙の中央に3cm四方の肌色々票を各3枚用意して貼付した。今回実験に供した肌色々票は、2.5YR、5.0YR、7.5YR、10.0YRのブルー7°である。2)実験の方法 対比現象の心理学実験は視感距離7mとし、実験の照度450Luxとした。実験に参加した学生は45名である。実験に用いたイメージ用語は8形容詞対とし、7段階評価法で評定を行なった。その評定結果の資料に基づいて分散分析を行ない、F分散比による8形容詞対のイメージの心理的な有意性を分析した。

結果 青色の明度を4°、6°、8°としたので、肌色色調との対比の関係はどのようなと考えたが、結果は次のようである。形容詞対の美しい—美しくないは5%の有意水準で23.29、暗い—明るい17.02、地味な—派手な12.66、あっさりした—くどいは11.79となって有意差があり、フラッシュな—モダンな、平凡な—個性的なは有意の差が認められなかった。このように、青色の明度の差のある色紙と肌色との関係は、美しい、明るいの数値が高かった。